

# 後拾遺集「雑三」の構造と特性について

実川 恵子

後拾遺集卷十七「雑三」は、全体が無常の歌で占められ、その点で古今集の雑下(雑)に似ると言われる。確かに、六巻に分類された雑歌のうち「雑三」に所収された七十首の詠歌は、それらの詞書に叙述された場や、歌の内容等から「無常」という観念を表白しているとは思われる。だが、視点を変えて読んでみると、古今集的な無常観とはいい得ない、性格を少し異にする部分もあるように感じられてならない。

本稿は、そうした後拾遺集「雑三」の詠歌への疑問を媒介にして、その構造や特性を考察してみようというものである。

なお、文中で引用した本文は、『新編国歌大観』に拠った。ただし、表記については私に改めたところもある。

## (一)

「雑三」の歌の内容から整理すると、おおよそ次のような構成になっていると思われる。

- 一、官職に関する歌(972～982) 11首
  - 二、厭世的な歌(983～994) 12首
  - 三、都を離れた僻遠の地での歌(995～1001) 7首
  - 四、世の無常の歌(1002～1019) 18首
  - 五、出家や隠棲に関する歌(1020～1041) 22首
- この構成は、古今集「雑下」とほぼ合致し、司召にもれた嘆きから

始まって、徐々にあはれを誘い無常を感じさせ、出家や隠棲に至るといふ過程の排列法がとられている。しかし、それぞれの歌群ごとに少なからず古今集とは異質で、後拾遺集独特な一面も見い出せるようにも思われる。

そこに焦点をあて、詠歌に則して具体的に考察してみることにした。

冒頭から十一首は、官職に関わる歌が連続する。その「雑三」巻頭歌は、元輔の、

備中守棟利みまかりにける人人のぞみ侍りと聞てうちなりける人  
のもとにつかはしける、

たれかまた年経ぬる身をふり捨てて吉備の中山こえんとすらんである。元輔は、本集に二六首入集する代表的歌人で、詞書に記された備中守棟利は清少納言の夫棟世の弟である。元輔は歌人としての名声は高いが、その反面官職には恵まれなかった人物であつたらしい。歌中の二、三句の「年経ぬる身をふり捨てて」等にその悲愴感が伝わってくる。巻頭に位置する理由もこの辺にあつたのだろうか。

続いて排列される四首(973～976)は、司召に洩れた嘆きを詠んでいる。973(重之)、974(匡衡)、976(国行)の三首は、いずれも詞書に「つかさめし」の語が見え、官職に恵まれない不遇感という具体的状況が詞書に記されている。この一連の官職に関わる歌の中で、次の二

首(977・978)は、異質な部分を含んでいると思われる。

小一条右大将に名づきたてまつるとてよみてそへて侍ける

源重之

みちのくのあだちの真弓ひくやとて君にわが身をまかせつるかな

後朱雀院御時としごろよみつかまつりけるに後冷泉院位につかせ

給ひて又よるにまゐりてのち上東門院にたてまつり侍ける

天台座主明快

雲のうへに光かくれしゆふべよりいくよといふに月を見るらん

重之歌は、小一条右大将(濟時)に名簿を奉って傘下に入ることを

乞うた歌、明快歌は後朱雀院、後冷泉院の二代の帝王の夜居を勤める

感懐を上東門院に奉った詠歌である。この両歌の排列は、具体的な事

実を記した詞書を付し、作者の個別的な事情を前面に出すという態度

をとつており、このような内容の詠歌は、先行勅撰集中の雑歌には見

られない。

続いて、次の三首(979・980・981)、

藏人にてかうぶりたまはりける日よめる

源経任

かぎりあればあまの羽衣ぬぎかへておりぞわづらふ雲のかけはし

右大弁通俊、藏人頭になりて侍りけるを、程へてよろこびいひに

つかはすとてよみ侍ける

周防内侍

うれしといふことはなべてになりぬればいはで思ふに程ぞへにける

後冷泉院御時、藏人にて侍けるを、かうぶりたまはりて又の日、

大式三位のつばねにつかはしける

橘為仲朝臣

沢水におりあるたづは年ふともなれし雲あぞ恋しかるべき

は、昇官したがゆえに生じた名残や昇官の祝いの歌である。このよう

な主題の詠歌は、古今集では、「雑上」(868〜870)に見られる。

巻頭からの官職に関わる歌群十一首の前半部に昇進のない嘆きの歌

が排列され、後半は昇進祝歌という構造をとっている。

981歌は、『橘為仲朝臣集』には「冠給はりたるに、周防内侍のおとづれたる返りごと」と詞書され、叙爵した事情を記さず、また歌を送った相手を異にする。おそらく、ここに撰者通俊の詞書改変の意識を認めることもできよう。

これらに続く歌群は、官位昇進のない述懐や、それに伴う沈淪などが主題となった詠歌である。それらの詞書には、原因となった事情が詳細に記述されている。

冒頭は、公任の詠歌(983)、

世の中を恨みてこもりゐて侍りけるころ、八重菊を見てよみ侍ける

おしなべてさく白菊は八重八重の花の霜とぞみえわたりける

だが、『公任卿集』には、宮との唱和歌として出、「中務の宮に、八重

菊植を給うて、文つくり遊びし給ひける」と作歌事情が付されており、

本集の詞書と一変する。当歌は、『今昔物語集』二四卷「公任大納言、

於<sup>テ</sup>白河家<sup>ノ</sup>詠<sup>ニ</sup>和歌<sup>ヲ</sup>語等三四」に、「亦此大納言世ノ中ヲ恨テ蟄居タ

リケル時、八重菊ヲミテヨミケル」とあり、本集の詞書はこれに拠つ

たと思われる。しかし、詞書の作歌事情と歌との関連が明確でなく、

もとは家集に示されたような作文会での詠歌であったという見方が妥

当であるかも知れない。撰者は、官位の不遇感からくる沈潜した嘆きの

冒頭を、あえてこのような詞書を付すことで排列せしめたとも考え

られる。

これに続く984・985歌も、詞書に「としごろしづみゐて」、「はらからなる人のしづみたるよし」とあって、官位昇進が思うように適わず沈淪している状況を詠む。次の986は、義定詠で詞書に「身のいたづらになうはてぬることをおもひなげきて播磨にたびたびかよひ侍りけるに、高砂の松を見て」とある。この詠歌は、『袋草紙』「雑談」に、

俊網朝臣下ニ向播磨之間、於高砂各詠和歌。而大宮先生藤原

義定詠此之、

ワレノミト思ヒコシカドタカサゴノオノヘノマツモマダタテリ  
ケリ

人々感歎。良暹云、女牛ニ腹ツカレタル類ヒカナト云々。自有  
如レ此事也。

とあり、作歌事情や良暹法師の評を載せる。また、987は、遁世してい  
る惠慶法師のもとに送った歌で、昇進がままならず、世に見放され、  
出家を考えた不遇の嘆きを詠じた歌。これに続く988歌は、津守国基の  
詠。詞書から詠みとると、加茂神主成助のもとに、昇進のない嘆きを  
詠ったもの。続く989歌（基長）も、「司召にもれて歎き待る比、女の  
もとにつかはし」た歌とされる。

この七首は、昇進のなさや官位停滞からくる嘆きや恨みが主題とな  
った歌群で、「雑三」冒頭の官職に恵れない不遇感の一連の歌群の歌  
より、その度合や心的悲愴感が強くなり、厭世的な気分を漂わせてい  
る印象を持つ。以上、冒頭から、十八首の官職に関わる事項から起こ  
る嘆きや恨み、ひいては厭世的な心情の詠歌の排列が終了する。

続く、兼俊母の990歌は、『千載佳句』、『和漢朗詠集』所収、羅虬  
「和スル扶風老人ト詩」の中の「雪中放ニ馬朝尋ヲ跡」を典拠とする。漢  
学の素養のあった兼俊母ならではの詠であろう。歌は牧場の愁訴が内  
容で、前述の官職に関わる詠歌群から、異例な排列となっているよう  
に思われる。次の991、992は堀河女御の詠歌である。991は、詞書に「小  
一条院東宮と聞えける時、思はずに位おり給ひけるに、火焚き屋など  
こぼちさはぐを見てよみ侍りける」とあり、小一条院の東宮辞退事件  
を詠む。これについては、『大鏡』「師尹伝」に詳細に叙述されるが、  
勅撰集詞書にあえてこのような叙述をするというのは、どのような理  
由に拠るものなのだろうか。

993は、「雑三」巻の二首の「題しらず」歌の一方で、道済の詠、

世の中を思ひみだれてつくづくとながむる宿に秋風ぞ吹く  
である。当歌は、『道済集』に「松風を聞く」と詞書する歌で、初句  
を「世のなかに」として載せる。もとは、このように題詠歌であつた  
らしく、これを敢えて「題しらず」としたのは何か意図するものがあ  
つたのだろうか。

この後には、下向や流罪に関わる悲しみをなどを詠じた次の七首  
(995-1001)が排列される。

ことありて播磨へまかりくだりける道より五月五日に京へつかは  
しける 中納言隆家

世の中のうきに生ひたるあやめ草けふは袂にねぞかかりける  
五月五日、服なりける人のもとにつかはしける 小弁

静範法師、八幡の宮のことにかかりて、伊豆の国に流されて、又  
の年の五月に内の大式三位のもとにつかはしける

五月闇ごごひの森のほととぎす人しれずのみなきわたるかな  
返し 藤原兼房朝臣

郭公ごごひの森になく声はきくよそ人の袖もぬれけり  
これをきこしめして、めしかへすよし仰せくだされけるを聞きて  
よめる 大式三位 素意法師

すべらぎもあら人神もなごむまでなきける森のほととぎすかな  
丹後の国にて保昌朝臣、あす狩せんといひける夜、鹿の鳴くをき  
きてよめる 和泉式部

ことわりやいかでか鹿の鳴かざらん今宵ばかりの命と思へば  
西宮のおほいまうちぎみ、つくしにまかりてのち、住み侍りける  
西宮の家を見ありきてよみ侍りける 惠慶法師

松風も岸うつ波ももるともに昔にあらぬおとのするかな

995・996は、詞書に「五月五日」という曆日記載<sup>3</sup>が付され、どちらも「あやめ(草)」が詠まれている。995は、この曆日的展開における排列は、古今集の伝統を基盤とし、また影響も受けたが、反面、それを打破しようとする試みも随所に見受けられる。このような構成法もそうした企ての一つであったかも知れない。次に排列された三首は、静範法師の関わった八幡宮事件での、伊豆国配流にまつわる兼房、大式三位の贈答歌に、素意法師が感動して詠じた歌の歌群である。

続く、和泉歌は現存の家集にはなく、伝承歌ともいわれる。詠作事情は詞書によって明らかなく、夫保昌朝臣が明日、狩に出るといふ夜の詠。今宵のみの命と思えば鹿も鳴くのも当然なことであると詠い、次の惠慶法師詠は、松吹く風も、池の岸辺を打つ波の音も、昔の音と違つた音がするという詠歌。

これらの流罪に関わる歌(996は喪に服した友に贈つたもの。1000は異質)の歌群は、997以降の五首に共通する要素として歌中に「ほととぎす」「鹿の鳴く声」「岸打つ波の音」という聴覚的な素材を盛り込んでいる点に注目される。これは、流罪という男性の政治的社会的身分に関する公的な事件に、人間の感情を織り込ませ、それが厭世の心情と結びついて表現されるという状況を考えると実に効果的に働いていると思われる。

続いて、世の無常を詠じた十八首の歌群を置く。前半の九首(1002-1010、うち1007は読人不知だが、内容から女歌)を女流歌人詠で占める。この冒頭は、小式部内侍の次の歌が排列されている。

二条前大まうちぎみ、日比わづらひておこたりてのち、などとは  
ざりつるぞといひ侍りければよめる 小式部内侍

死ぬばかり歎きにこそは歎きしかいきてとふべき身にしあらねば  
二条前大まうちぎみ(教通)が数日来病氣し、回復してのち、なぜ  
見舞わなかつたかと言つたので贈つた歌で、歌中に掛詞や対語を用い

た観念的な詠歌。続く1003・1004は、斎宮女御と東三条院の贈答歌で、「雑三」巻中、二首の「題しらず」歌の一首である。1003は、『斎宮女御集』の詞書では、「大王の宮に」とし東三条院詮子を指す。両者の友愛の情を詠じた歌であろうか。この三首はいずれも身辺から生じたやるせなさを中心に詠じた歌で、この冒頭を飾るに相応しい排列である。

1005から1014は、詞書に「世中さわがしき頃」1005、「世中はかなかりける比」1006、「世の中つねなく侍りける頃」1008 1009(和泉式部)、「思ふこと侍りける比」1010、「世の中さわがしく侍りける頃」1011(堀河右大臣)、「世中常なく侍りける比」1013(赤染衛門)、「世の中を何にたとへんといふ」1014(順)、「中関白のいみに法興院にこもりて、あかつきがた千鳥の鳴き侍りければ」1015(円昭法師)とあり、身辺から生じる一連の「世のはかなさ」を詠じた歌群を排列する。この十一首は、他の歌群に比して、詞書が概して簡略で、人名記述が少ない点に注目されよう。長文で詳細な詠作事情が付された歌は、詞書から歌の内容を規定される要素を持つ。その部分が、少ないということは、詠歌自体に比重がかかり、無常という心的な重層性を表白させることになるのではないだろうか。

このように「世の無常」の歌群は、前半に女流歌人詠を排し、形態的には簡略な詞書を付し、詠歌内容をきわだたせ、この「雑三」巻の主題である「無常」を表白させているのであろうか。

この、「世のはかなさ」を詠じた歌群の終末は、漢詩を踏まえた次の四首(1016-1019)が並ぶ。

文集の蕭々暗雨打窓声といふ心をよめる 大式高遠  
こひしくはゆめにも人を見るべきを窓うつ雨に目をさましつづ  
王昭君をよめる 赤染衛門

歎きこし道の露にもまさりけりなれにし里を恋ふる涙は

思ひきやふるき都をたちはなれ胡の国人にならんものとは  
 僧都懐寿  
 懷円法師

見るからに鏡の影のつらきかなからざりせばかからまじやは  
 高遠詠は、『白氏文集』卷三「上陽白髮人」を踏まえて詠出したもの。次の三首は詞書にあるように「王昭君」を題に詠じている。このように、詩文や詩句を読み込んだ本説取りの歌は、拾遺集から後拾遺集の転換期に求められた新しい試みとしての一つの作歌態度の頭れであり、雑歌にもこの試みは実行されたようである。また、この四首は、次の歌群の転換部に位置しており、主題転換の意図を示したものであるのかも知れない。

卷末は、二二首の出家や隠棲などを題材にした詠歌である。その排列の様相を示すと表Iのとおりである。

この歌群の冒頭は、井手尼の詠歌、

入道前のおほいまうち君、法成寺にて念仏おこなひ侍りける比、  
 後夜の時にあはんとて、近き所にやどりて侍りけるに、鳥のなき  
 侍りければ、昔を思ひいでてよみ侍りける

いにしへはつらくきこえし鳥のねのうれしきさへぞものはかなしき  
 である。この詠歌は、『栄花物語』卷十八「たまのうてな」所収の「尼達の和歌」に載る。ここでは、この歌を山の井の尼としている。

この井手の尼・山の井の尼は同一人物で、大納言橋好古女と言われる橋三位清子の後身で、清子が道隆の男道頼と関係のあったらしいところから、山の井を称し、橋氏の創建した井手寺に住んだか、そこで出家したかによる命名であろうと岩野・杉崎氏は推測される。<sup>4)</sup>

この歌は、詞書に叙述されるように、昔の恋の逢瀬の別れを回想し、もの悲しい思いを募らせたもの。続く1021は、修行出立の思いを述べた歌である。1022～1036は出家（尼、法師）に関わる歌群が排列される。1024

表I

1041	1040	1039	1038	1037	1036	1035	1034	1033	1032	1031	1030	1029	1028	1027	1026	1025	1024	1023	1022	1021	1020	
上東門院中将	律師朝範	国房	良暹法師	素意法師	公任	義懐	三条院	統理	公任	上東門院	顕基	伊勢大輔	読人しらず	選子内親王	中宮内侍	加賀左衛門	律師長済	長能	馬内侍	増基法師	井手尼	作者
〃	〃	〃	〃	隠棲	出家	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	出家	懐旧	〃	〃	〃	出家	修行	懐古	主題
		良暹法師		良暹法師	成信			三条院				後一条院	成順	上東門院		中宮内侍	頼家				道長	詞書中の人名

1030（うち贈答歌三組）の十首のうち五首の詞書に出家の対象となつた人物名が記されている。続く、1032は、公任の、

世をそむく人々おほく侍るころ

思ひしる人もありける世の中をいつとてすぐすなるらん

という歌で、この歌は『拾遺集』巻二十「哀傷」の巻に、「成信重家ら出家し侍りける比、左大弁行成がもとにつかはしける」と詞書し、重出する。この『拾遺集』の詞書記述と比較すると、当巻では「世をそむく人々」と具体的な人名を省略している。前述した出家に関わる歌群から、「世をそむく」歌に移行する冒頭部という観点から、敢て具体的な人名を記述せずにおいた撰者の意図を読み取ることが可能だろうか。この詞書の「世をそむく」歌群五首の終末も公任の、

世をそむきて長谷に侍りけるころ、入道の中将のもとよりまだ住

みなれじかしなど申したりければ

谷風になれずといかが思ふらん心ははやくすみにしものを

という詠歌で構成されている点は注目される。

「雑三」の巻末歌群は、次に掲げる隠棲の歌の五首（1037-1041）である。

良暹法師、大原にこもりぬと聞てつかはしける 素意法師

み草おしおぼるの清水底澄みて心に月の影は浮かぶや

返し 良暹法師

ほどへてや月もうかばん大原やおぼるの清水すむ名ばかりぞ

良暹法師のもとにつかはしける 藤原国房

思ひやる心さへこそさびしけれ大原山の秋の夕ぐれ

弟なりける法師の、山ごもりして侍りけるがもとより、かくてな

ん、ありとぐましきといひて侍りける返りごとにつかはしける

律師長範

思はずに入るとは見えきあづさ弓かへらばかへれ人のためかは

長楽寺にすみ侍りける比、人の、なにごとかといひて侍りければ  
つかはしける 上東門院中將

思ひやれとふ人もなき山里のかけひの水の心ほそさを

1037-1039の三首は、大原に隠棲していた良暹法師との贈答歌と、良暹法師に送った歌で、いずれも、良暹の悟りの心境を思ひやつたものである。良暹は本集に十四首を入集する歌人で、能因、道命に次いで有力な僧侶歌人の一人である。また、橘俊綱と親しく、彼の伏見邸サロンを通して孝善・成助・国房らとの交流も認められる。このように良暹のような僧侶歌人や津守国基のような神宮の歌人を評価し、その詠歌を積極的に入集しようとする撰者の試みは、この「雑三」の終末部にも顕れているように思える。

次歌は、律師朝範の、

おとうとなりける法師の、山ごもりして侍りけるがもとより、かくてなん、ありとぐましきといひて侍りける返り事につかはしける

る

思はずに入るとは見えきあづさ弓かへらばかへれ人のためかは  
という詠歌である。朝範は、平棟仲男で、詞書の「おとうとなりける法師」は忠快、妹に周防内侍がいる。縁語を巧みに用いたこの詠は、

出家した弟の法師に帰りを促した愛情あふれる詠歌である。

「雑三」の巻末は次の歌が排されている。

長楽寺に住み侍りける比、人の何事かといひて侍りければつかはしける 上東門院中將

思ひやれとふ人もなき山里のかけひの水の心ほそさを

訪ねる人もいない山里に住む作者の頼りない心ほそさを、笈の上に

流れる水の音に託して詠じた歌であろう。詞書に記されたように長楽

寺の近辺の山里のわびしげな情景と、作者のやるせない心情を一首中

に盛り込んでいる。こうした性格を有する歌は、中世和歌に生まれる

自己観照の萌芽とも受け取れよう。「無常」の歌を収集した「雑三」巻の巻末に置いた意味も理解できよう。

以上のように、後拾遺集「雑三」巻の構造は、古今集「雑下」を基盤としながらも、詠歌内容による分類や排列に後拾遺集独自の構造の意図が見られるように思われる。

この七十首の前半部に、「無常」を導く日常生活に於ける具体的な嘆きや述懐を詠じた歌を排し、その転換部には漢詩等に典拠を求めた歌や、観念的な歌を置くなど、随所に新奇な趣向を盛り込んだ編纂方針がとられているように思える。また、先行勅撰集には見られない七首の「流謫」の歌を排するなど構成上も注目される。

後半は、前半の嘆きや述懐を詠じた歌を受けて、出家や隠棲などを題材とした歌を中心に集め、「無常観」を導くという構成をとっている。前半の詳細な作歌事情を語る詞書に比して、後半は簡略な詞書記述になっており、歌が、詞書に依拠する要素が少なくなつて、「無常」という観念を凝視して詠作しようとする傾向の顕れと見ることもできよう。

## (二)

前述した構造を参照しながら次に、規範とした古今集「雑下」との比較において述べることにする。

歌数的には、古今六八首、後拾遺七十首とほぼ同数の収集である。古今集「雑下」巻は、松田武夫氏<sup>5)</sup>に拠るとその構造は、「世の中の一巻」を無常と観じ、従つて、世の中を厭い、その結果遁世に志す——こうした無常に就いての一般的説明から始まり、人間は如何なる場合に無常観を抱くに至るかを、具体的に、流罪・解任等の公的生活の中にとらえる一方、憂悶・失意・失望・絶縁・無音・不信等の私的生活の中にも見出し、その処置として、遁世・流浪・献白などの方法が採られ

るということで結ぶのが雑歌下の全体的構造である。」と述べられる。またこの巻は、無常という一つのテーマ、思想によって貫かれたものと示唆される。

後拾遺集「雑三」は、こうした構造や内容の継承を基盤として編纂されたものと思われるが、いくつかの相違点もある。

まず、古今集雑歌との形態的な相違点は、その詞書表記である。古今集「雑下」巻の六八首の約半数が「題しらず、読人しらず」であるのに反して、後拾遺集「雑三」では「題しらず、読人しらず」は全くない。わずかに二首の題しらず歌（作者名あり）が入集するのみで、所収歌のほとんどに人名記述がある長文で詳細な詞書を有するのである。この顕著な現象については、逸話趣味的傾向や説話生成への気運<sup>6)</sup>等と重ね合わせた御論考もある。

こうした相違点を捉えつつ、次にこの二集の雑歌を具体的に考察し、後拾遺集と古今集の質的变化を捉え、また後拾遺集「雑三」の独自性や特性を探つてみたいと思ふのである。

総ての雑歌について述べる余裕を持たないので、ここでは主題構成の上で注目される数首をとり掲げて考察してみたい。

まず、この無常の巻をときおこす古今、後拾遺集の次の二首の巻頭歌をとり掲げることとする。

題しらず

よみ人しらず

世の中はなにか常なるあすか川きのふの淵ぞけふは瀬になる

備中守棟利身まかりけるかはりを、人々望み侍るとききて、内な

りける人のもとにつかはしける

清原元輔

たれかまた年経ぬる身をふり捨てて吉備の中山こえんとすらん  
古今集の「世の中」の巻頭歌は、「世の中は何かつねなる」という観念の例証として飛鳥川を引いて、世の種々の変転の無常観を詠う。歌の調べと歌の内容が融合して歌としての拡がりを持っており、巻頭

を飾るにふさわしい詠歌ともいえよう。一方、後拾遺集は巻頭からきわめて個別的な作歌事情が付加されており、作者の述懐がより具体的に詠じられているものと思われる。

古今集、後拾遺集両集に共通して流罪の歌というのがある。後拾遺集に載る流罪の歌は七首と数量的に増加の傾向にある。これらについては構成のところで述べたので、それに譲るが、この七首の歌群は、同じ素材を用いた歌や暦日記述を用いた詞書を排列させたり、聴覚的素材を連環させて、一つの世界を主張するなど構成的に苦心の跡も見られるようである。

古今集の流罪の歌は、次の二首（961・962）である。

隠岐国に流されて侍りける時によめる 篁朝臣

思うひきやひなの別れにおとろへてあまの縄たきいさりせむとは

田むらの御時に事にあたりて津の国の「須磨」といふ所にこもり侍りける 在原行平朝臣

わくらばにとふ人あらば須磨の浦にもしほたれつつわぶとこたへよ  
篁の歌は、流罪にあつての自分の感情を素直に表現しており、初句切れの力強い詠歌で、次の962も、切々たる哀愁が感じられる歌でその調べも優美である。

題しらず よみ人しらず

あはれてふことこそうたて世の中を思ひ離れぬほだしなりけれ（939）  
世の中は夢か現か現とも夢とも知らずありてなければ（942）

いかならむ巖のなかに住まばかは世の憂きことの聞え来ざらん（952）  
は、「題しらず、読人しらず」の詠歌である。いずれの歌も、感情からほとばしり出る詠嘆の調べは、無条件に納得できる文学性がある。

このような点では後拾遺集「雑三」に所収された「無常」の歌は、古今集ほど昇華していない。それは、歌が詠歌場面に引きずられて個別的な主張で終わってしまったという感がしてならない。このよう

に、古今集と後拾遺集の雑歌は本質的な機能上の違いがあるのではなからうか。

後拾遺集「雑三」巻における構造の分析、そして古今集「雑下」巻との比較検討を基に次に、後拾遺集「雑三」の詠歌の特性について考えてみたい。

雑部の概観的な構成については、島田氏<sup>(8)</sup>、松本真奈美氏<sup>(9)</sup>の御論がある。島田氏は、前述したようないくつかの現象を捉えて、宗教的雰囲気<sup>(8)</sup>の強まりの様相を示しているものとし、それは平安時代下降期の時代相を反映したものであると述べられる。

おおまかには確かに、このような現象を把握することはできようが、微細に渡って詠んで見ると、後拾遺集「雑三」には独自の特性のいくつかを指摘することができるのである。

その一つは、既に多方面から注目される長文の詞書記述の問題である。その顕著な現象を捉えるために、古今集「雑下」の詞書記述と比較した様相を、次に掲げる表Ⅱに記した。

この表からも明確なように、後拾遺集では「雑三」の半数が二行以上に渡る長文で詳細な詞書が付されている状況にある。それに反して、

〈表Ⅱ〉

歌数		後拾遺集 70	古今集 68
詞書			
長詞	文書	35 (50%)	15 (22%)
人記	名述	29 (41%)	3 (0.4%)
題しらず 読人しらず		0	27 (40%)
題しらず 作者あり		2	5



古今集「雑下」では、入集歌の四割が「題しらず、読んしらず」詠である。これらの詠歌は、ほとんどが、作者名や作歌時期の乏しい古歌たる理由に拠るものであるが、「雑三」にあつては、この「題しらず、読んしらず」詠は、全くない。わずかに二首(993・1003)が、「題しらず」歌である。993は道濟、1003は斎宮女御詠である。この「題しらず」歌についての詳細は、構成のところでも述べたのでそれに譲るが、後拾遺集の「題しらず」歌にあつては、出典資料になつたと思われるものには付されていた詞書を敢えて省いて、「題しらず」とするなど、ある種の作意を感じさせるものがある。道濟・斎宮女御歌は、歌群排列の際の主題の転換の意味を有しているものとも受けとることができようである。

いずれにしても、全体が具体的な作歌事情を述べる詠歌にあつて、「題しらず」と記述した歌にも独自で文芸的な主張も有したといえるのではなからうか。

詳細で具体的な事情を付す詞書中に、人名記述の多いことも後拾遺集雑歌の特質であろう。詞書中の人名記述数という点で整理すると、四季部や恋部に比べて、雑部には圧倒的に多く、先行勅撰集には見られない増加の傾向にある。

このように作品独自で、個別的な事情を詞書に記述する傾向は、どのような意味を持つのだろうか。では、この「雑三」巻の人名記述はどうだろうか。七十首の入集歌のうち、人名の記述数は三一、全体の四四、二パーセントを占めている。このうち、上東門院・良暹法師が二回名を顕わしている。武田早苗氏<sup>10</sup>によると、上東門院は、他の巻の詞書にも記され、後冷泉院、宇治前太政大臣に次いで多く登場する。

この詞書に多く登場する人物は、詠作者というよりは歌合や歌会の主催者であるという見解を述べられる。いずれにしても、後拾遺集は、個別的な作歌事情を積極的に取り入れて編纂していこうとする姿勢が

このような面からも窺える。その点では、古今集の具体的で個人的な作歌事情を削除し、純粹に文学的な普遍性を追求していこうとする姿勢とは本質的に異なる傾向にある。

後拾遺集撰者は、雑部編纂にあつて、古今集の「雑下」巻とは、異質で革新的な一面をこの詞書記述という点に注いだものと思われる。後拾遺集の「雑三」という巻は、こうした詠作の場や状況と密着した詠作法による、一つの独特な無常の世界を形成しているものと思われる。

註1 島田良二氏「八代集の雑歌について」(『平安前期私家集の研究』桜楓社刊。昭43・4所収)。

2 菊地靖彦氏「後拾遺集歌人和泉式部——主として入集状況から——」(『文芸研究』122・平成元・9の中で、「雑三」の内容についての指摘の部分)。

3 川村晃生氏「『後拾遺集』巻頭歌群をめぐって」(『和歌文学研究』・42・昭56・4)。

4 岩野祐吉氏「橋典侍考」(『国語と国文学』昭30・2・杉崎重遠氏「山の井の尼・井手の尼」桜楓社出版社読書3・昭34)。

5 「新釈古今和歌集」下巻「雑下」項。

6 武田早苗氏「後拾遺集の詞書をめぐって」(『中古文学』39・昭62・5)。

7 斎藤照子氏「後拾遺集雑二の性格——恋部との比較をとおして——」(『和洋国文研究』22・昭62・3)。

8 島田氏前掲書。

9 「後拾遺和歌集雑部に関する試論——雑部の分類意識をめぐって——」(『国文』68・昭63・1)。

10 武田氏前掲書。